

人間を不幸にする世界の構造を透視する人

くにさだきみ詩集『国家の成分』に寄せて

1

岡山の詩人くにさだきみさんの詩には、誰も言っていない世界の構造の歪みを直視しようとする激しいエネルギーを感じる。戦後間もない頃から比較的温和で芸術的な詩を書く岡山の詩人たち、例えば永瀬清子、坂本明子たちの中にあつて、くにさださんは全く異なる詩人であつた。全国的に見てもこのようなスケールの大きい詩を書く詩人は、鳴海英吉、浜田知章、大崎二郎などのリアリズムの社会性や他者性の強い個性的な詩人たちの中で考えると収まりがいいと考えられる。くにさだきみさんは、徹底した孤立を恐れない単独者であり、世界の苦惱を感じて言わなければいけない真実を、言つてしまふ勇氣ある詩人なのだ。その意味では浜田知章のような、その時代の真実を絶えず詩の中で語ろうとした詩人たちの系譜に繋がつてくると私は考えていた。

くにさだきみさんの第一詩集『蒼の楕円』は、一九五五年に小林美和子さんと共著の詩集だつた。小林さんが『断章の絵』で十篇、くにさださんは本名の中田喜美の名で書かれた『女人埋没』の十篇を合わせた詩集だつた。くにさださんの詩

集の冒頭の詩に次の「砂上の幻影」がある。

砂上の幻影

(1)

白い胸に白い空がある
白い胸に白い風がすぎる

鳥肌の女の そゝけだつ胸をあばけ
そこに

たとえば噛まれた一握りの砂がありはしないか
枯れた あばらに

死のしみついた砂の音が
塩っぱい鼓動をきざみはしないか

火の粉のさかんに降る日があつた
灰のしきりに舞う日があつた

火傷した鉄骨が 小さく空を切つて落とす日
空は にわかに喪にふくし

落剥する鳥が ピンでさされた喪章となつた
穂すすきの街に風はかれる

爆風に洗われた建物の そそりたつ影が砂にさゝる

風は枯れる

影がそそりたつ

地に砂は死にたえる

爆心地の一角

すべての 木は土にかえつた

すべての 人は砂にかえつた

はかりしれない 時の風化がそこにあつた

(2)

鳥肌の女よ そゝけだつ胸をあばけ

刻々くずれる砂の下から

戦車が噛み合わせる 錆びた歯車のきしみを聞け

炸裂した薬莖に しみついた火薬の刺戟臭を嗅げ

爆心地の がらんどうの建物の陰で

雷管は再び火薬を抱きはじめる

爆心地のざらざらした砂をかんで

戦車は再び動きはじめる

爆心地の つめたい砂の上に

錆びたことごとくの鉄が鏝う

今 砂をふるいおとした砂時計は一齊に逆立ち

砂にうもれた 一切の死がよみがえる

歴史は再び繰り返すと言う

砂のしきりに降る日があつた

灰のしきりに降る日があつた

火の粉のさかんに舞う日があつた

鳥肌の女よ そゝけだつその胸をあばけ

死のしみついた砂がきざむ

塩っぱい胸の鼓動をあばけ

刻々くずれる砂の上の

軍靴のきざむ 重い死の足どりをあばけ

この詩集が出た一九五五年は原爆投下から十年が経ち、一九五一年に峠三吉の『原爆詩集』が刊行され、一九五二年には浜田知章や長谷川龍生たちが「山河」で原爆詩特集をして、原爆詩運動が開始されてまもない頃だつた。くにさださんは隣接する広島市の原爆を二十歳代前半から自分の大きなテーマであると感じていたのだろう。その意味でくにさださんは、浜田知章とかなり共通点を持った本格的なリアリズムの詩人として出発したのだ。「鳥肌の女よ そゝけだつその胸

をあげけ」という一行は、くにさださんのその後の詩作の原点を示している。このわが身を切り裂くようにして歴史的な悲劇と対峙しようとする激しいエネルギーを私はこの一行から感じるのだ。

朝鮮戦争で原爆が使用されるかもしれないという危機意識から峠三吉は『原爆詩集』をまとめたし、原民喜の自殺は再びアメリカが原爆を使用することへの抗議でもあったと広島の人々は考えていたと言われる。後に浜田知章が提唱した被爆していない詩人こそが原爆詩を書き世界に発信しなければならぬという「ヒロシマの哲学」に、くにさださんもきつと呼応するように詩作したのではないか。かりに原爆投下後の広島を忘れたら、人類はもつと悲劇的な戦争を再び始めるのではないかとという危機意識がこの詩を生み出したのだ。広島・長崎を最後にしなければならぬという「ヒロシマの哲学」を自らの内面に深く沈めて、二十歳前半のくにさださんは故郷の中で独りで詩作の歩みを始めたのだろう。

2

二十歳代の後半の一九六一年に刊行された第二詩集『庄』の十四篇の詩の中に「天国喪失」がある。この詩を読むと、くにさださんがあらゆる幻想を排除しようとする激しさや強さが詩に結実しているのが読み取れる。天上の宗教に決して向かないリアリストであり、永遠に地上に生きるものたち

に関わろうとする態度が強い意志力を生み出している。

天国喪失

あなたは仏教徒ではないのだから、
仏のひざに抱かれたりはしないだろう。
まして、キリストなどではないのだから、
死に臨んで十字架を背負うたりもしなかった。
どんな説話も信じないあなたは、
黄泉の国へも、
たびだたない。

ものいうものは石になるならわし、
それは、ポーランドの民話ではないから、
死んだあなたは、石にされる。
石に変わった石の貌は、
スフィンクスになつて問いつつける。
どうすればよいのか。
どうすればよいのだろう。

醜い異形のマスクを担うて、
娘のわたしが国々をさまよう。
なの花がいちめん、

なの花がいっぱい。

あなたは何もたべないから、
蚕豆の煮えるにおいなど、なつかしくもなんともない
だろう。

あなたは何も見えないから、

甘いめしべの手ざわりなど、くすぐったくもないでし

よう。

わたしばかりがばかにひもじく、あてどない旅の乞食
でした。

おなさけ深いみほとけさま。

死んだおやじと生きているのろまな娘は、どこを歩め

ばよいのでしょうか。

(略)

渴いた沙漠のどの旅人より、
オアシスの妄想を忘れよう。

どんな神にも祈らないから、私の口はかたい口ばし。

私は鳥のひもじさのなかの石に変わった石の貌から、
ざくろ石の瞳をつもう。

死者の顔からかおをめくり、死者の胸からむねをはず

そっ。

たとえ耳まで口がさけても、石という石を食いつくそう。

おお、

どんな妄想も捨てた沙漠のどまん中で、

般若のように死体を食べ、おびただしい数の卵を生
もう。

やがて私にも最期がきて、おろおろと死を迎えるとき、
わたしのおのく意識のなかを、
どこからともなく数万の虫が集まり、
なまあたたかい血を吸うだろう。

この詩には、くにさださんが情感を一切排除して、石になつた死者たちを喰らいながら生きて子孫を残そうとする人間の修羅を書き記している。神も仏も信じないくにさださんが、実はくにさださんのような無宗教の日本人はたくさんいるはずだ。しかし死が近づくと神や仏にすがろうとする弱さをくにさださんは許せないのだろう。人間はそのような生半可な宗教心では決して救われないのだと語っている。人間のおぞましさをこのように描くことによつて、人間の原罪に近いところを見詰め、本来的な赤裸々な人間存在に近づこうとしていたのではないか。その意味でくにさださんは真の信仰者に近いところにいた。このような試みは決して理解が簡単にされなかつただろう。くにさださんは単独者として自己の内面の問題として宗教心と唯物論の双方を誠実に考えていたことが分かる。そしてくにさださんは唯物論的な考えを選んだのだろう。それはどちらが正しいかという問題ではなく、そ

のように選択して生き続けているというだけだ。その意味でこの詩は、くにさださんの内面の格闘の姿が刻印されている重要な作品だと私には思われる。

3

くにさださんは一九五二年に岡山大学教育学部二年課程を卒業し中学校教師になる。一九七〇年ごろまで教師生活は続いたが、年譜によるとこの年にくにさださんは総社市市議会議員に選出された。教師時代に障害児教育を担当していたので、きつと行政の壁を感じて、その限界を超えるためには市議員になるという選択肢があつたのだろう。四期十六年をその後の議員活動で務めたという。浜田知章さんの自説として、何度も聞かされたが、政治家には女性の方が適しているという考えがあつた。男は権力を握ると支配的になり悪いことをするのが常だが、女は生活者の目線がありそんなに悪いことはないと言っていたことを思い出した。そんな女性政治家としてくにさださんは先駆者だつたのだ。一九八〇年刊行された第三詩集『けだもの考証録』の次の詩などを読むとそのように思われてくる。

わたしは女

1

半分半分ききながら、
いちずに情念をこどもに燃やし、
ともかくも、生きてきた、
わたしは、
女。

2

性格をなおせという。
女らしくなれ、という。
そういうことで議員がつとまるかという。

いま、

わたしは教師をやめている。
生んだこどもも、育ててきたこどもたちも、
そろそろ大人になろうとしている。

性格をなおす——とはどういうことか。

女らしく——とはどういうことか。

しかつめらしい議員の仕事が、

わたしでつとまるのか、つとまらぬのか。

男ばかりがいる田舎町の議会で、

非行の実態や、進学について、

性格をなおせという。

女らしくなれ、という。

どういわれようが、わたしは女、

男ではなく、わたしは、

女。

こどもを生むことと、育てることに、

生涯の大半をついやしてきた、

わたしは女だ。

味噌汁をつくって、オシメを洗って、

時間ギリギリ、こどもを預け、

自転車を乗りすて、走りかけの汽車に跳び乗り、

ベルの鳴る教室へかけこむ。

学校と家との往復を、

すつとんでいき、すつとんで帰り、

あかぎれの手に、

チヨーク・教科書と、

鍋釜・包丁とをせわしなく持ちかえては、

ひとさまのこどもと、じぶんのこどもと、

職場のことと、家族のことと、

亭主の叱言こしごと、校長のそれとを、

学童保育とか障害児保育のこと、

教室・廊下の雨漏りのようす、

抱えきれないこどもの実情をぶちまけ、

時間いっぱいギリギリのところまで、

市長や教育長、民生部長らを追及する。

教員のころより、いつそう痩せ、

髪を短かく切り、真つ黒けの顔で、

ビラを渡したり、署名をもらったり、

母さんたちと、先生たちと、

こどものことで話をする。

役所と、地域と、家族のあいだを、

50 ccのバイクで、ブルブル、クルクル、

すつとんでいき、すつとんで帰り、

あかぎれだらけの、しみる手で葱をきざみ、

——味噌汁をつくる。

女らしくわたしはならない。

わたしは女だ。

一九八〇年に刊行された第三詩集『けだもの考証録』の二十篇の中で最もくにさださんが自己の日常や生き方を語っている作品がこの「わたしは女」だ。今読んでも働く女性を

勇気づける作品だ。男勝りの能力のある女性は実はたくさんいる。人間の半分は女性なのだから、男に伍して様々な能力を持つている女性は山ほどいることは当たり前だ。しかし日本の社会では、ほんの少し前までは女は女らしく家にいるべきだという社会通念が存在した。職場でも女はサブ的な仕事でしゃばらないのが美德とされた。しかしそのような通念を壊して活躍するためには、スーパーウーマンにならなければならぬ。この詩に出てくるくにさださんはまさにスーパーウーマンであり、それを支えたのは家族の協力であり、多くの人の支援であり、またくにさださんのそれを詩に書いてしまうパワフルな表現力であり詩的精神であつただろう。くにさださんは教師であり、妻であり、母であり、政治家でありながら、それらを全て抱えながら本質的には、時代の中で苦悩する人びとを直視する詩人であり続けている。

4

第四詩集『指話』には、くにさださんの代表作の長編詩であり二〇〇八年八月に藤沢の市民たちが朗読会「波の音」で暗唱した「アカイ背をもつ被爆の記録」が収録されている。この詩は、詩をあまり読まない市民たちにも感動を与える作品なのだ。この五篇の連作から冒頭の「まつすぐな目」を用してみる。

まつすぐな目

この子は だれですか
ひとりのこどもが 見ております

このひとは だれですか

誰の こども衆ですか

——アカイ背をもつ 被爆の記録——

その表紙からも 裏表紙からも

ひとりのこどもが 見ております

こどもは

防空頭巾を きております

(日本が とつくに脱いで捨てた)

防空頭巾を きております

防空頭巾の下からは

すこし 繻帯が 見えております

モンペの名まえは よみとれませんが

モンペのボタンが 欠けております

——アカイ背をもつ 被爆の記録——

ゴメンナサイ

見られているのが 苦しくなります

(あまりにも これは ひどい いたすら)

ピカの閃光を焦げつかせて

わたしの息子に 瓜ふたつの

この子

この子は いったい だれの子ども衆

不思議なほどに まっしろい

しろい にぎりめしを 手にもつ この子

表紙からも 裏表紙からも

表紙をめくった ページからも

ははおやを 見つめてくる

にんげんを 見つめてくる

ピカを見た こどもの

まつすぐな

目

くにさださんは長崎原爆の防空頭巾をかぶった少女の写真を見て衝撃を受けた。ピカを受けた少女の眼差しに想像をめぐらそうとする。放心しているような少女の瞳にあるものと

は何であつたか。少女の体験が同じ日本人として無関係だといえないのであり、二度と世界中どんな場所においてもこのような少女を生み出してしまわないために、どうしたらいいのか。少女の「まつすぐな目」から眼を背けてはならないことをこの詩では記している。くにさださんは被爆体験がなくとも、このように一枚の写真から想像力を働かせて読むものの心に原爆の悲劇を伝える詩がかかる可能性を示したのだ。戦争の悲惨さは、多くの子どもたちの運命をこのように変えていったことを写真の奥に入り込むことよって語りかけてくる。一人の少女の「まつすぐな目」を通して原爆を探っていくという姿勢は、原爆詩を書く上で多く示唆されるところがある。

5

第五詩集『貌の餌箱』の冒頭の詩「花がうつくしいのは」は、くにさださんの素直な感覚がそのまま記された心に残る詩だ。くにさださんはこのような作品を実は書けるのだが、あえて多くは書かないのだろう。その意味でくにさださんの詩篇の中では例外であるが、このような花に感動する詩的精神をいつも胸に秘めて、人の世の醜さとのバランスをとっているのだろう。

花がうつくしいのは

花が
うつくしいのは
からだじゅうの
愛を

お日さまにむけ
ひらいているから

おしべよ
めしべよ

だれにむけて
なににむけて

こんなにも
美しく

愛をひらくことが
できるだろう

ひとは

ひとは花のように美しく生きられるだろうか、という問いをくにさださんは発している。私はくにさださんがそれは可能だと語っているように思える。しかしそれを可能にするのはひとが花と同じように「からだじゅうの愛」を開かなければ

ばならないという。果たしてそんなことが出来るのだろうか。一人ひとりがその可能性に向けて生きることの大切さを暗示しているように感じられた。他者のためであると同時に自分が精一杯生きることの大切さを花に託して語っているのだ。

6

第六詩集『ミッドウエーのラブホテル』の二十八篇の中の一章十篇は全てが原爆に関係する詩篇だ。その中で詩「まっさかさまのにおい」がしなやかに原爆を後世に伝えようとしている。

まっさかさまのにおい

さぬきうどんはいかがですか。

たらの芽・ふきのとう、いかがです。

土佐のかつお節はどうですか。

小鯛のささ漬は

からし明太子はいりませんか。

山菜餅・山菜おこわを買ってください。

「全国物産模擬店」ほどの店も、
においを売る店ばかりであった。

海のおい 山のおい

ハブ酒とか球磨焼酎。

琉球泡盛のにおいも――

静岡の新茶、和歌山の八朔、

福井の昆布、鳴門のわかめ。

鳥賊を焼くにおい、

串を焼くにおい。めざしのおい。

たこ焼きにたい焼へ、

とうもろこしの焼けたにおい。

香ばしい

ものを焼くにおいの立ちこめる中で、

それとは違う、

まっさかさまの焼けたにおいを

ひとりの少女が売っていた。

「買ってください。」

『木の葉のように焼かれて』を
買ってください。

ひろしまの

木の葉のように焼かれた

八月六日を買ってください。」

ひとごみに押され
倒されそうになりながら少女は、
とても食べられそうもない
まっさかさまの
ひろしまのにおいを売っている。

広島・長崎の体験をいかに風化させないで後世に伝えるか。この課題は日本人にとっても世界にとっても重要な課題であることは間違いない。くにさださんは日本人が各地方の物産のにおいからその存在を誇りに思うように、なぜ「ひろしまのにおい」を共有できないのかと問うている。少女が原爆体験記である『木の葉のように焼かれて』をたずさえて原爆ドーム周辺で「まっさかさまの／ひろしまのにおいを売っていた」ことの意味とは、私たちに広島を風化させない方法を提示しているように思われる。新川和江さんは詩「ヒロシマの水」で朝に一杯の水を飲むときに、原民喜の詩の「水ヲ下サイ」を想起し被爆者の思いを甦らせていく。くにさださんは日常の暮らしの中のにおいから、「ひろしまのにおい」を想起し被爆者の焼け爛れ、嗅いだことの無い異臭を発しながら消えていった存在を甦らそうとしているのだ。

7

第九詩集『写撃者』の（あとがきにかえて）に書かれてあった詩「においのことば」からも分かるとおり、くにさださんは存在者の臭いによって想像力を掻き立てられる詩人なのだ。

においのことば

（前半部を略）

女王バチに昇格したハチが

「フェロモン」を出しはじめ

以前の取除かれた女王バチ同様、

王台づくりを抑える意味と――

卵巣の発達を抑える意味と――

二重の意味のへにおいのことばを

昇格したら早速に新女王バチは

王台づくりに精だした

働きバチに口移しにのませる。

こうして王座は確立するのだ。

ミツバチのこの「女王フェロモン」は

「階級維持フェロモン」とも呼ばれている。

化学構造もすでにわかって

人工的にも合成が可能なのだが、
一般には
なぜかロイヤル・ゼリーと混同されている。

ひとのことばはへおとのことばへ

単純に

そう思ってもいいものだろうか。

電波が

口移しに流すロイヤルな情報。

（大喪の礼・大嘗祭・即位の礼。秋篠の宮ご成婚）

とびかう戦場情報戦。

（湾岸から日本へは

ペンタゴン検閲すみの無害な情報のみが送られてくる）

「警戒フェロモン」

「階級維持フェロモン」

茶の間にも

危険ななにかが匂うのであるが、

一般に

へにおいのことばへは知られてはいない。

☆

「フェロモン」

心ときめくとき胸さわぐとき

ふと嗅ぎあてるへにおいのことばへ

第三章「火炎樹の下で」の詩「火炎樹の下で」が心に残り、
優れた詩篇だと考えている。

火炎樹の下で

――キム・フックさんが語ったこと――

ひろいサイゴン大学のキャンパス

黄色い花をつける火炎樹の下でキム・フックさんが

語ったこと

へ飛行機の爆音 爆撃の音

ナパーム弾の焼ける音

人間の悲鳴

そして自分の走る足音

一九七二年六月八日

チャンバンで撮られたニック・ウト氏の写真

『爆弾の降った日』

ピュリッツァー賞のその写真には写らない

駆けていく少女の――懸命の足音

ベトナムのカメラマン ニックウト氏が

世界にひろげたのはベトナムの悲鳴――

うす目をあけて構合するときの

――ハマグリのことば――

くにさださんは国家権力が単純に法律や行政や原爆などの最強の軍事力で民衆を支配しているとは考えていない。支配者たちの巧妙な支配は、へにおいのことばへなどを総動員して民衆の内側からなされることを暴いていく。くにさださんの詩作の大きなテーマは、国家権力がどのようにして巧妙に民衆を支配するのかを知力と感受性を総動員して明るみに出していこうとする試みだ。へにおいのことばへを発見していくくにさださんは、人間が発する言語領域が実は多様な表現領域と交差することによって存在していることを示している。

第八詩集『オリの春』の長編詩「オリの春」は、へアカンボウハ マンゾクニ ウマレタ」と一九四五年七月十七日に米国務大臣スティムソンが連合国首脳のチャーチルたちに渡したメモにあつた核兵器の誕生からはじまる。そしてチエルノブイリの悲劇や米国の世界戦略によって翻弄され、ベトナム戦争の兵站基地になっていく沖繩の春を書き残している。

第十詩集『罪の翻訳』の五篇の連作「罪の翻訳」は天皇の戦争責任、原爆を投下した操縦士の言葉、米国の人種差別エイズウイルスの入った血液製剤を製造したミドリ十字と関東軍七三一部隊の関係などを重層的に織り上げている。私は

そのとき少女が
自分の足音を聞きながら
逃げていたとは知らなかった
少女が十二歳だったということも
裸なのは

ナバーム弾で
シャツもズボンも焼かれたからだということも
その名がキム・フックだということも
知らなかった

ずっと後まで知らなかった わたしは――

戦禍のなかを駆けぬけてきたひとの

そのひとだけが知る そのひとの足音

火炎樹を知って 火炎樹の下ではじめて聴く

キム・フックさんの足音の話

はじめて知る

『爆弾の降った日』の足音のこと

くにさださんの視線は一枚の写真を見詰めることで、その写真の登場人物やその背景が動き出してしまふ。そしてその場所の音を聞き、においさえかぐことができる。そのように肉薄していくことは、真似の出来ないくにさださんの特徴だ

ろう。焼夷弾による衣服や肌の焼けるにおいをかぎながら、キム・フックさんの逃げる足音が聞こえてくる。民家への無差別爆弾の悲劇をこれほどリアルに伝えている詩は数少ないだろう。爆撃・空襲の悲劇を詩はこのように記すことが出来るという良き手本となる詩篇だ。

くにさださんは第十一詩集『壁の日録』、第十二詩集『訴える手』、第十三詩集『静かな朝』、第十四詩集『ブッシュさんのコップ』とその後も私たちが避けてしまいがちな禁忌の場所を問い、詩にできそうな困難なテーマに挑戦し続けている。その姿勢に私は敬意を抱き、既成概念を砕かれて多くの刺激を得ている。

8

新詩集の『国家の成分』は最も難しい現実の国家とは何かという問いを発し、その奇怪な存在形態を浮き彫りにさせた詩群だ。その動機となったのは、北朝鮮の「成分」という言葉だった。社会主義国家であるはずの北朝鮮の現状に切り込むと同時に、日本と米国などの国家というものは、その成立基盤が民衆支配の根幹に民衆を分断させ敵対させて操っていくという構造を、くにさださんは透視していくのだ。詩人であり政治家であったくにさださんだからこのような類を見ない詩篇が成立したのだ。人間が集まり人間を幸福にさせるシステムであった国家が、逆に人間たちを階層化させて序

国家の成分

北朝鮮では
人民が

「成分」に分けられている。

〈核心階層〉

〈動揺階層〉

〈敵対階層〉

成分は

大きく分けてこの三つだという。

朝鮮労働党の党員とか

一九四五年八月以前に労働者・貧農だったもの、

朝鮮戦争で

死亡した兵士の遺族は、

〈核心階層〉

その逆の

〈敵対階層〉は、

地主。

資本家。

キリスト教徒や仏教徒。

〈動揺階層〉というのは

最後に、詩集題の「国家の成分」を一部引用する。困難な状況の中でも個人の力を信じて国家や世界を変えていきたいと実践している多くの方に読んでもらいたい。

いまは労働者階層なのだけれども、以前は

中小企業の経営者だったり

土地もちの農民だったりしたという。

そういえば、

わたしの提出した履歴書にも

小さく

『本人階層』という欄があつて、

そこに

「事務労働者」と書くように言われた。

(略)

あのとき

日本共産党員のわたしは

国家にとって――

まぎれもなく

〈敵対階層〉であつたはずだが、

党内での「成分」は

たぶん

〈動揺階層〉のひとりであつたろう。

どこの国でも

いつの時代でも

民衆は

「成分」に分けられるのだ。

(「国家の成分」の前半部)